「グローバル教育実践演習」から学んだこと、そして今後へ向けて

江畑　正平

１　はじめに～受講のきっかけ

最初は、もっと外を知りたいという漠然とした気持ちであった。しかし、講義で中国が教育に莫大な国家予算をかけている教育大国であることを知り、実際の学校の様子を学びたいと思ったこと。その中国の子どもたちと実際に授業がしてみたいという思いが強くなったこと。何よりも、他国の文化にふれるという、新しいことに挑戦したい、経験してみてこれからの教員人生に活かしたいという願いが生じたこと。これがグローバル教育実践演習を受講したきっかけであった。

２　実際に学んだこと

（１） 学校の様子

想像以上に学校が開放的な雰囲気であり、地域の方の出入りが多いことに驚かされた。「学校を中心としてまちづくりが行われている」という印象である。例えば、多くの子どもたちが夕食を学校の食堂で食べている。すぐそばの学校の敷地内で様々な運動系、文科系科目の指導が行われている。子どもたちが寝泊まりするためのスペースもあった。学校で学んだことの地域での発表は、お祭りとのコラボレーション企画で、まちを挙げて盛り上げようとしている印象であった。

（２） 授業実践・観察

五泉市の魅力を伝えたり、複合図形の面積の求め方を考えたりする授業を実践した。通訳を介しての授業であったが、私の「OK！」「Good！」の一言に笑顔になる。短い言葉でも心が通ずることを実感した瞬間であった。

また、授業を観察して、子どもたちの英語力の高さには驚かされた。小学校低学年からほぼオールイングリッシュの授業が行われている。実際に、日常生活で使えるような英語の習得に力を入れて取り組んでいた。そして、使うような場面を作るような授業を行っていた。関連して、プレゼン能力の高さを感じた。相手意識をもち、自分たちの取組のポイント、意見をもらいたい点を分かりやすくまとめていた。堂々としているだけでなく、情熱が伝わってくるような語り掛けであった。

（３） 文化交流

交流の原点は「食の場」にある。講義で学んだことである。今回の実践演習でその意味を実感した。言葉が通じなくても、「乾杯」から交流が始まる。そこからスマホの翻訳機能を用いて、会話が始まる。お互いが分かり合おうとする気持ちがあるからだろう。何となくだが意思疎通ができると、とても嬉しい気持ちになり握手をしたり、一緒に写真を撮影したりする。そしてまた乾杯が始まる。乾杯は世界をつなぐである。

３　おわりに～今後に向けて

CAREY　school の先生の「教育に国境はない」という言葉が大変印象に残っている。２つの意味があると考えている。１つ目、子どもたちが将来どこの国で暮らすことになっても、他者と協働し、明るくたくましく生きていける力を育てていくこと。２つ目、教師自身が様々な国のよさを学ぶことである。変化の激しい現在、未来を生きる子どもたちのために、視野を広げ、学び続ける大切さをご指導くださったのだと思っている。私は、「子どもたちの笑顔に国境はない」と強く実感した。子どもたちの笑顔は、世界全体の宝、未来なのだと思った。子どもたちのために、自分を磨き高め続ける努力ができる教師、そして大人でありたい。

最後になりましたが、今回のグローバル教育実践演習に携わってくださった全ての方に心から御礼申し上げます。本当に、ありがとうございました。